別紙２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　呉衛峰

本論文「『新撰万葉集』研究」は、平安時代前半に成った（上巻序に寛平五年〈893〉、下巻序に延喜十三年〈913〉の日付がある）、和歌と七言絶句の漢詩とを組み合わせて載せる『新撰万葉集』について、その歌と詩との関係を考察したものである。この『新撰万葉集』は、上巻と下巻との間で、あきらかな断層があり、本論文は、その点に鑑みて上巻を考察の対象とする。そして、従来の研究では、漢詩が、歌の翻訳、あるいは歌の解釈として見られてきたことを批判して、歌と詩とが、和漢文学伝統の交流と対比において、交差あるいは平行するなかで、融合したり対立したりして文学的な磁場を作ることを見るべきだと提起する。その方法的提起は明快である。本論文は、その提起とともに、それをテキスト理解によって具体化したのであり、あらたな『新撰万葉集』研究の可能性をひらいたものと評価することができる。

本論文は、第一章「序論」、第二章「歌の心・詩の意」、第三章「和漢比較の世界」、第四章「和漢併存の系譜」の四章から成る。第一章は方法的問題を提起し、第二、三章は、それをテキスト分析として具体化し、第四章では、文学史な見渡しのなかにこのテキストの位置付けを試みるという構成である。

第一章の方法的立場は、研究史の批判的な振り返りから導かれる。従来の研究が、詩を、歌の翻訳ないし解釈としかとらえてこなかったことを批判して、歌と詩との「対照的関係」をとらえることを主張するのである。「対照的関係」というのは、歌と詩がそれぞれの文学伝統を負うものとしてありつつ、あわせ読むことによって映発して理解されるようなありようをいう。翻訳・解釈といった、一方向的な関係で理解されるべきではないという提起であり、『新撰万葉集』にとって新しい理解を拓こうとするものである。

特筆されるのは、そうした方法的開拓が、テキストの読解によってささえられ、具体化されてゆくことである。第二、三章に展開されるテキストの読解（テキスト分析）は、本論文の真面目といってよい。きちんとテキストを読むというのは当たり前のことだが、その基本をつくしてゆくことは高く評価される。

すなわち、第二章は、第一節「鳴く鹿の和と漢」、第二節「あやめ草と菖蒲」、第三節「鶴の声」、第四節「松の風琴の声に入る」、第五節「うつせみと蝉賛美」という標題が示すとおり、鹿・あやめ草（菖蒲）・鶴・琴・蝉といった素材をめぐって、作品に即して見てゆく

のである。たとえば、第一節では、上巻・秋５７の歌と詩について、歌が、鹿の声に感じられる秋の悲哀を歌うのに対して、詩は、鹿鳴という伝統的モチーフを負って、昔日の交歓と不在の友人への思いを表現するものとして「歌との接点を持ちながら」漢詩の伝統において展開することを析出してみせる。その手続きは、オーソドックスに用例をおさえ、実証的に論述がなされる。同じやりかたで他の素材についても検討を続けて、詩と歌との「対照的関係」というべきありようが確認されてゆくのであり、対象の取り上げ方が異なるが、第三章も同じ考察が続けられる。第三章は、第一節「梵門と隠逸」、第二節「恋と閨怨と友情」の二節から成るが、標題の示すように、主題領域というべき面からアプローチする。たとえば、第一節では、夏３６のように、歌が「夏山に入る」と夏安居を歌うのに対して、番の詩は、隠逸の境地を表現するものとしてとらえられ、和漢対照のありようが確認され直されてゆくのである。

本論文の主部たる第二、三章であるが、ここでは、論旨がさきに展開されるのでなく、素材を変えて同じ見地が繰り返し示される。展開性はもたないが、綿密なテキスト読解の繰り返しが、問題を掘り起こしてゆくのであり――歌と詩との違いをはっきり意識するなかにあるものとして、「遊戯性」をはらむという問題がとらえ据えられたことも注意される――、その説得性は高く評価される。

第四章は、そうした『新撰万葉集』の歌と詩の関係把握に立って、文学史を見渡しながら、『句題和歌』『和漢朗詠集』『詩歌合』という和漢併存のテキストとは異なるものとして、『新撰万葉集』の特性を見定める。

本論文によって、文学史的な位置づけをも視野に入れた『新撰万葉集』論の可能性が開示されたことは、『新撰万葉集』研究を推し進めるものとして、高く評価されてよい。

今後の発展方向について、審査のなかでは「遊戯性」という問題を、詩作練習としてとらえることが考えられるという示唆も与えられたが、漢詩については、七言絶句という形式の選択そのものからして考える必要があることも指摘された。さらに、この上巻の考察を経て、あらためて下巻をどう見るかが課題となること（いったん上巻に限って見ることは正当な手続きだとしても、下巻をどうとらえ直すかが問われること）も指摘された。そうした発展がさらなる研鑽によって十分期待されるというのが、審査委員の一致した評価であった。

また、詩の訓読に不安な部分が少なくないこと、用語の上で不適切なものが見られること、詩の解釈に関して揺れが認められること等、いくつかの弱点も指摘されたが、そうした欠点は本論文の価値を損なうものではないということが委員の一致する評価であった。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。